

< 発表者 >

フェロー

菅原 文彦

## <東日本大震災を経験して>

東日本大震災発生時、私は南三陸町立志津川中学校に勤務していた菅原文彦と申します。

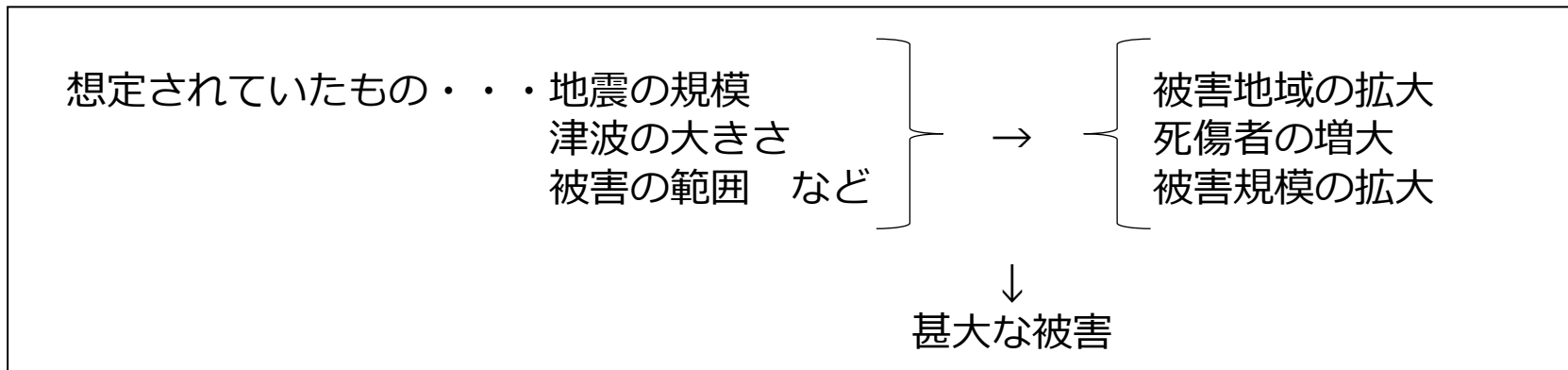
その学校で被災し、生徒308名、教職員約30名、避難住民約300名、計約650名による避難所生活を体験しました。

その経験から学んだこと、感じたこと、その経験から考えたことについてその一端をまとめました。



**東日本大震災後に、頻繁に使われた言葉に「想定外」というものがあります。**

災害の規模、範囲、被害が想定を超えていたというものです。



「想定」していたことに、どれだけの意味があり、それに基づいた避難計画やハザードマップにどれだけの効果があったのか疑問を抱かざるを得ません。

想定されていた津波は6mでしたが、実際にはその3倍以上の津波が襲来した地域もありました。

津波の高さは、地形や障害物の有無により場所により大きく変わることは容易に予想できたことです。

## 南三陸町の防災対策庁舎の悲劇はその一例です。

防災対策庁舎はその想定に基づいて造られ、津波襲来時の防災対策の拠点としての役割を担っていましたが、実際の津波はそれをはるかに超えていたため、甚大な被害を生むことになってしまいました。

### 「命を繋ぐ」ことの大切さも改めて認識されました。

「自分の命をどう守るか」の意識を高め、具体的な避難行動につなげる必要性を痛感しました。

震災発生時、消防士、看護師、役場職員など若く働き盛りの人たちが、多数犠牲になりました。

自分の職責を全うすることや困難に立ち向かうことを美徳とする日本においては、彼らの行動は賞賛されることであり尊いことです。しかし「自分の命を守る」行動への意識をより高め、行動に移す必要性を感じます。若く優秀な人材を失うことは、その後の震災対応や復興への人材不足を生む大きな要因となっています。

「自分の命を守る」行動を前提とした「他者の命の尊重」への取り組みとして弱者を救済する具体的な方策を吟味することと、減災や共助を目的としたコミュニティをつくるための地域づくりが必要であることを痛感しました。



## 「自然に対する畏敬の念」を持ち続けること

自然の猛威の前では、人間がいかに無力であるかを痛感しました。

人類の急激な発展により、自然に対する畏敬の念が薄れ、人間の傲慢さが見え隠れします。

しかし、自然の猛威に全くなすすべが無い現実を目の当たりにし、人間は、より謙虚に自然と向き合い、人類も自然の一部として存在していることを再認識する必要があります。

地震や津波、台風、暴風、大雨や大雪など多くの災害に見舞われ、災害列島といっても良いほどの我が国において、自然と対決するのではなく自然と共存・共生していく意識と方策を考えていくことが大切であります。

今後も地球上では、各地で自然災害が起こるでしょう。

特に、環境問題や異常気象が各地で発生していることを念頭に「想定外」という言い訳がましい事後評価に終始するのではなく、災害はどこでも起こりうるという視点からその対策と対応を実効性のある形で強力に推進していく必要があります。

菅原 文彦